2024 年 5 月 18 日（土）から 6 月 29（土）まで 、Kanda & Oliveira で福田尚代の個展「ひとすくい」が開催された。

福田尚代は「文字と言葉のアーティスト」と言われ、消しゴムや鉛筆、定規といった文房具や原稿用紙、それにハンカチや本といった、幼い頃から身近にあるものを用いて作品を制作している。

本展では、Kanda & Oliveira の 3 フロアをつかい、1 階では 6320 個の消しゴムを彫刻したインスタレーション《漂着物／海辺の洞窟》（2002-2024）を公開したほか、2 階では夢から着想した新作のドローイング《夢ノート／袖の涙／泉》を展示。また、3 階では、本のページを折り込んだ《翼あるもの》、本のしおりをほぐして雲のようにした《書物の魂》、ギャラリーのある土地から想起された回文作品などを、海辺の洞窟や大きな船のようだと福田が感じた建物空間を存分につかって展開した。

展覧会の終了後の会場にて、アートジャーナリストでウェブマガジン『REALKYOTO FORUM』編集長（当時）の小崎哲哉が、福田尚代に対してインタビューを行った。

〒273-0031 千葉県船橋市西船 1 丁目 1 番 16-2 号 | 050-5469-1905 | info@kandaoliveira.com | www.kandaoliveira.com

神田：小崎さん、福田さん、本日はよろしくお願いします。以前、小崎さんが『THE KYOTO』の連載「現代アートを読む」で福田さんの展覧会を評論された際、福田さんを「言葉と文字のアーティスト」と表現されていました。その言葉を、今回の展覧会「ひとすくい」で福田さんをご紹介する際にも引用させていただきました。本日は小崎さんに福田さんの作品について、さらに掘り下げていただきたく思っております。

小崎：ありがとうございます。その表現について少し補足したいのですが、確かに福田さんは「言葉と文字のアーティスト」ですが、それを文字通りに捉えると大切なものが抜けてしまいます。

たとえば１階のインスタレーション作品は、一見「言葉や文字」とは直接的な関係がないようにも見えます。それは多分、福田さんの作品のコアとなっている言葉の周りには、種に対する実のように豊かなものが付随しているんだと思います。そういった意味で、「福田尚代は言葉と文字のアーティストである」という表現は、幅広く捉えていただければと思います。

〒273-0031 千葉県船橋市西船 1 丁目 1 番 16-2 号 | 050-5469-1905 | info@kandaoliveira.com | www.kandaoliveira.com

撮影 Kanda & Oliveira

【1 階】

6320 個の消しゴムを彫刻したインスタレーション《漂着物／海辺の洞窟》

福田尚代の 彫刻の「原点」

小崎：1 階のインスタレーション《漂着物／海辺の洞窟》では、消しゴムが素材として用いられていますね。消しゴムは、福田さんご自身の人生や、私たちが共有する記憶に深く結びついたものだと思います。

福田：消しゴムは子ども時代から身近なものでした。つかうたびに小さくなって最後は消えてしまったり、欠片になってどこかに紛れてしまったり。私にとって消しゴムは「消えていく」ことの象徴なんです。一方で、消しゴムはそれ自体が文字や

〒273-0031 千葉県船橋市西船 1 丁目 1 番 16-2 号 | 050-5469-1905 | info@kandaoliveira.com | www.kandaoliveira.com

絵を「消す」ものでもありますよね。消しゴムへの彫刻は、存在と非在の中間の世界をあらわにしながら、双方を行き来させてくれる行為なのだと思います。

消しゴムといえば、最近、自分の彫刻の原点のひとつに気づいたんです。
デッサンを始めた高校生の頃、同じ箇所を何度も消しゴムで消して描き直すうちに紙に穴があいてしまうことが度々ありました。今振り返ると、その〈穴〉が私にとっては大切なもので、彫刻の原点だったのかもしれないなって。

小崎：面白いですね。彫刻は「彫って刻む」ものですが、穴をつくろうという人はあんまりいないんじゃないでしょうか。

福田：彫刻と呼んでいますが、ものを削いで、究極的にはなくなるかもしれないことをしているのでしょうね。その過程でかりそめの形を得てとどまることもあれば、本当になくなってしまうこともあります。《漂着物／海辺の洞窟》では器の形をたくさん彫刻していますが、薄く…より薄く…と彫刻刀で削ぐうちに、いきすぎて穴があいてしまったものも結構あります。
今回の展覧会のタイトルは「ひとすくい」（一掬いと人救いをかけている）ですから何かを掬おうとしている展覧会なのに、実際には穴があいて掬うことができない器もあるわけです。意図せずできてしまったものも取り除かず一緒にしておくと、底にあいた〈穴〉そのものが大切に思え始めて。そもそも消しゴムって、余白はもとより非在が具現化した状態にも思えます。

デュシャンの関心との共通点

小崎：作品の中にはドーナツ形のものもありますね。こちらの〈穴〉」は意図してつくられたんでしょうか。

福田：これは救命浮輪でもあり、句点でもあり、ドーナツでもあるのですが、お菓子のドーナツの穴は、私の中では昔からかなり大切なものなんです。子どもの頃、ドーナツの穴だけを、つまり〈穴〉そのものを製造する工場が出てくる物語を本で読んだんです。穴をつくるようすを実際に絵に描くことは難しいけれど、言葉の力のみによって喚起され得る、普段の視覚とは異なる視野があるでしょう？　頭の中に浮かぶそういうイメージって、曖昧なのになぜか実感できますよね。たとえ頭の中であれ、〈穴〉そのものがそれだけで存在し得るとはどういうことなんだろう？そんな幼少期の問いが、大学時代に作品を手掛け始めた頃にひとつの関心事として再来しました。

〒273-0031 千葉県船橋市西船 1 丁目 1 番 16-2 号 | 050-5469-1905 | info@kandaoliveira.com | www.kandaoliveira.com

小崎：その〈穴〉への関心は、マルセル・デュシャンのトポロジー（位相幾何学）への関心とも重なる部分がありそうです。

トポロジーは、デュシャンに影響を与えたアンリ・ポアンカレという数学者が学問領域を開いたもので、形の本質を探求する学問です。たとえば、ドーナツとマグカップの形状は全く違って見えるけれど、トポロジー的には本質的に同じものだと説明されます。デュシャンはそういったことに関心を持っていました。

デュシャンと同様に、福田さんは〈世界の成り立ち〉や〈存在の根源〉といったことに深い関心を抱いていらっしゃると思うんです。

福田：ポアンカレ予想を証明したペレルマンが自ら姿を消して、結局キノコ狩りをしながら隠遁生活を送っていたことも、デュシャンやバートルビーやドーナツの穴が示唆する不在ーー〈存在の根源〉に通じるものを感じて惹かれます。

「超薄」の彫刻作品

小崎：直方体の輪郭だけが残されたような形状のものもありますね。これはどういったものですか。

福田：同じものを夢で見たことが制作の始まりですが、ここでも限界まで彫り続けることを試みています。完全にはなくさず、ぎりぎり存在するというか、存在と非在が同時にあるような状態を考えていた時期ですね。

小崎：それもデュシャンに近いと感じました。デュシャンは代表作《花嫁は 裸にされて 彼女の独身者たちによって、さえも（通称「大ガラス」）》を作り始めた頃、自分が今一番関心があるのは「削減すること（reduce)」だと書いています。引き算する感覚ですね。
それは、後に「アンフラマンス」という概念につながっていきました。「超薄」とか「極薄」って訳されるんですが、薄さすらなく、それを超えているということなので、現実には存在しない。「インターフェース（界面）」に近いかもしれません。

ドーナツの穴も同じで、どんどんドーナツを削っていくと、穴だけが残った瞬間に穴という存在は消えてしまう。じゃあ、どこまでは穴があるといえて、どこからなくなるんだろう…と、そういったことを現代アートの父・デュシャンも考えていたわけですが、福田さんも同じことを考えているのが面白いですね。

〒273-0031 千葉県船橋市西船 1 丁目 1 番 16-2 号 | 050-5469-1905 | info@kandaoliveira.com | www.kandaoliveira.com

福田：そうですね。このあたりの彫刻は、あるかないかのぎりぎりのところでかろうじてこの世界に留まっている…でも、いずれはなくなってしまう、それでもいいのかもしれない… そんな考えを行ったり来たりしていた頃のものです。今回もそうですが〈波打ち際〉が以前から作品に通底する要素のひとつで、波が寄せては返すように境界が有と無のどちら側にもあり得る状態を暗示しています。

小崎：確かに海岸線という存在も、その境界はどこなのかと考えると難しいですよね。

鑑賞者がいなくても「存在」する彫刻

小崎：紐が出ているものは何でしょうか。

福田：照明のスイッチを彫刻したものです。制作をしているときは、このスイッチをオフにすると、ここにある消しゴムの彫刻が全て消えてしまうと思いながら手を動かしています。

油画専攻の学生だった頃、展覧会で立派な絵を見ていたら停電したことがあったんです。急に照明が消えて真っ暗になったとき、目の前の絵が一瞬で消えてしまい、強い衝撃を受けました。私がしていることはなんだろう、今まで見えていたものは本当に存在していたのだろうかと、しばらくは絵を描くこともできなくなってしまったんです。

小崎：その停電をきっかけに、絵が描けなくなってしまったんですか。

福田：ものすごく細かい字を膨大に書いたり、細かい点を無数に打ったり、自分が本当に実感できて、子どもの頃から無心にしていたことしかできなくなってしまいました。あたりまえのように作品然としているものへの疑いが大きくなってしまったのだと思います。

そして、光がなくても存在を知覚できるものや、誰も観ていなくても存在が成立するもの… 人類がいない星や宇宙空間に置かれている作品や、死者のための作品とか…そういったことを夢想するようになりました。今でも考え続けています。

小崎：そういった時間は、アーティストにとって必要なものかもしれないですね。

〒273-0031 千葉県船橋市西船 1 丁目 1 番 16-2 号 | 050-5469-1905 | info@kandaoliveira.com | www.kandaoliveira.com

撮影 Kanda & Oliveira

【2 階】

2 階には、書物のページを折り込んだ《翼あるもの》シリーズの新作 1 点と、紙に色鉛筆で描いた新作《夢ノート／袖の涙／泉》3 点が並ぶ。

《夢ノート／袖の涙／泉》

描くこと、彫刻することの本質とは？

小崎：3 点の平面作品がとても素敵ですね。

福田：「袖の涙」シリーズの新しい展開です。私は袖を身体が拡張した部分であると捉えていて、涙を拭くことによって布地が朽ちて身体の境界が曖昧になっていく光景が頭の中にずっとあるんです。誰かが亡くなったとき、その人を悼んで流れた涙を含んだ袖には、彼岸と此岸の境界を超える力が潜んでいるというような･･･。昔

〒273-0031 千葉県船橋市西船 1 丁目 1 番 16-2 号 | 050-5469-1905 | info@kandaoliveira.com | www.kandaoliveira.com

から袖にはそういった呪術的な側面がありますよね。たとえば「袖を振る」とか「袖を裏返して寝る」とか。

小崎：和歌にもありますね。

福田：袖の涙――涙が袖に染み込んで何かが起きるーーということがたくさん詠まれてきましたよね。涙と袖は言葉の世界とも深いつながりがあるように感じます。

涙は私の作品の根底にずっとあるモチーフだけど、近年はよりあらわになってきて、涙は言葉の源泉なんじゃないかというふうにも考えるんです。海原に涙が一粒落ちても――私たちはそれを取り出すことはできないけれど、芸術はその一粒を掬い出してくれるものではないかと思うのです。

3 点の《夢ノート／袖の涙／泉》には、いずれも喪服のような洋服の袖が描かれています。夜見た夢を記録したノートをもとに描いたものですが、描く過程で色や雰囲気が澄んでいくというか、何かが非常に浄化されるような感覚を覚えたんです。子どもの頃に感じていた夢中に絵を描くことの本質ってこういうことだったのかもしれません。

小崎：先ほど 1 階で福田さんがお話しされていたことにつながるのかもしれませんが、真ん中の部分は少しへこんでいますね。

福田：そうなんです、描きすぎて紙が波打ってしまいました。「これ以上描くと穴があいてしまう」と思ったときに、昔もこういうことがよくあった…と記憶がよみがえりました。そのとき、非在を生み出すというか…彼岸とつながることこそが私の彫刻の原点かもしれないと、不意に気づいたんです。

小崎：書家の石川九楊さんは「筆蝕（ひっしょく）」という概念を提唱しています。通常は「筆で触れる（筆触）」と書きますが、彼の概念では、削ったりひっかいたりするような意味合いで「筆で蝕む（筆蝕）」と書くんです。つまり、書くという行為はものを欠落させることであると。書でも絵でも、人類は昔から木の枝や石をつかって表面を削り落とすことで表現を行ってきました。福田さんの表現は、「筆蝕」に近いのかなと感じます。

〒273-0031 千葉県船橋市西船 1 丁目 1 番 16-2 号 | 050-5469-1905 | info@kandaoliveira.com | www.kandaoliveira.com

福田：確かにそういう感覚がありますね。3 階には同じく「袖の涙」シリーズとしてハンカチを素材にした《アイスハーケン、そしてアイリス》という作品があります。その作品も今のお話と少しつながるかもしれません。

〒273-0031 千葉県船橋市西船 1 丁目 1 番 16-2 号 | 050-5469-1905 | info@kandaoliveira.com | www.kandaoliveira.com

撮影 Kanda & Oliveira

【3 階】

3 階では、自然光の入る明るい空間に複数の作品が点在している。《アイスハーケン、そしてアイリス》（2018-2024）はハンカチを素材に、吊された状態で展示された作品だ。

《アイスハーケン、そしてアイリス》

「世界の縁」に留まるための表現

小崎：3 階の部屋は明るくて、本の表紙の色なども非常にカラフルです。
ただ、吊られているものが少し怖く感じます。殺されて木に吊された黒人を歌ったビリー・ホリデイの『奇妙な果実』を思い出しました。

福田：明るい雰囲気ではあるけれど、死のイメージが漂っているということですか？

〒273-0031 千葉県船橋市西船 1 丁目 1 番 16-2 号 | 050-5469-1905 | info@kandaoliveira.com | www.kandaoliveira.com

小崎：展示室に入った瞬間、首吊り死体のように捉えてしまいました。でも、きっと意図は違うんですよね。

福田：ええ、意図は違いました。でも、哀悼のイメージはにじみ出ているかもしれません。

2010 年に国立新美術館の「アーティスト・ファイル」展に参加した際に、過去の自分の作品が一堂に会しました。そこで観客の視点で自分の作品を見渡したら、死のイメージが潜在する作品ばかりで驚きました。明澄な雰囲気だったし、そう感じたのは自分だけかもしれませんが、それからは自覚的になりました。

この《アイスハーケン、そしてアイリス》は、現代の日本では袖よりも直接涙を拭くイメージの強いハンカチを脱色し、一面に刺繍をほどこした作品です。タイトルにある「アイスハーケン」は、登山のときに岩や氷に刺して手がかりにする道具です。先ほどの「筆蝕」のお話ともつながるかもしれませんね。

芸術家は、キャンバスに対峙して筆を入れる瞬間や、彫刻刀を木に刺す瞬間、針を布に刺す一瞬、息をとめて平面上の一点に紙片を貼り付けるコラージュの瞬間など、さまざまな制作の場で本質的な意味では同等の動きをしています。傍から見たらささやかな所作でも、本人にとっては命のかかった無音の一撃、そういった大勢の芸術家の手の動きを、氷山でアイスハーケンを振るうさまと重ねています。小さな部屋で制作していても、ふり返って下を見れば奈落の底、世界を削りつつ自分も削るような状態です。

つまり芸術家たちがアイスハーケンを突き立てているのは、〈世界の縁（ヘリ）〉だと思うのです。ほんの 1 ミリか 2 ミリでも爪を崖に突き立てて、かろうじてぶら下がっている…

《アイスハーケン、そしてアイリス》の「アイリス」は、虹、それと目の虹彩やカメラの絞り、ギリシア神話の女神などを指しますが、植物のアヤメでもあります。ヘルマン・ヘッセの短編『アヤメ』が高校生の頃から創作の原点のひとつなんです。物語では、最後に主人公が小さくなってアヤメの蕾――穴の中に入っていきますが、そこは死後に訪れる場所なのか、生まれる前にいた場所なのか…別の世界との深いつながりを考えさせられる内容です。作品を制作するということは、そこへ行き、でも必ず帰ってくることなのだと思います。

〒273-0031 千葉県船橋市西船 1 丁目 1 番 16-2 号 | 050-5469-1905 | info@kandaoliveira.com | www.kandaoliveira.com

この作品では、刺繍ーー針を布に刺すことーーを延々と繰り返しているけれど、針を布に刺す行為もひとつの術（すべ）であって、布の表と裏、つまり此岸と彼岸を行き来することだと感じています。

鑑賞者のコンディションによって見え方が変化する作品

小崎：壁に記された回文が非常に印象的です。遠くからは見えないのですが、近づくと光っているようにも見えます。

福田：文字を青いグラデーションにしているので、遠くから見ると、上から下へとだんだんと薄くなり壁に溶け込んでいるように見えます。一見、降りそそぐ雨のようですが、波打ち際を持ちあげて縦に 90 度立たせた状態を試みています。じつは海面が光っているんですね。

小崎 ：海にまつわる語彙が出てくるので、1 階の展示とも呼応していますね。

〒273-0031 千葉県船橋市西船 1 丁目 1 番 16-2 号 | 050-5469-1905 | info@kandaoliveira.com | www.kandaoliveira.com

今回の展覧会では、まず 1 階に福田さんの原点を感じられる展示がある。2 階に上がると、福田さんの活動の重要な要素のひとつである本をつかった《翼あるもの》シリーズの作品があって、その中にはご自身の本の一節をフィーチャーしたものもある。あわせて「袖の涙」という主題が示される。さらに、3 階に上がると、海辺や涙などのイメージが広がる… 福田さんの全貌とまでは言いませんが、福田さんがどういった関心のもとに制作をされてきたのかということが伝わる、とても良い構成だと思います。

福田：ありがとうございます。作品ひとつひとつは、悲しみや死を悼む行為を含んでいます。ただ、Kanda & Oliveira の光に満ちた明るい空間に置くことで浄化されるような感覚がありました。死のイメージを孕む作品ですが、観た人がそれを超えて「きれい」と喜ぶ姿は嬉しくもあり、まったく別の視点が入ることで軽やかになるというか…救われる気持ちです。

小崎：デュシャンは「網膜を喜ばせるのではなく、脳を刺激せよ」と言いました。でも、技術的に「ああ、きれいだ」と感じさせることも重要だと思います。

福田さんの作品からは怖さと美しさが両義的に感じられます。福田さんの中には、ポジティブな世界観とネガティブな世界観があって、どちらに重きを置くかはその都度揺らいでいて、さらに、それを観る人のコンディションによっても変わってくるんでしょう。

福田：空間の光や天候や湿度、その人個人のものの見方でも変わりますよね。

神田：会期中、鑑賞者の中には涙が止まらなくなる方もいらっしゃったんです。大切な方を思い出されて、「ここに来てよかった」と言っていただいたことが忘れられません。

言葉のつながりの「跳躍」と「必然性」

小崎：良いアート作品というのは、まず、さまざまな解釈が可能なものだと思います。アーティストはコンセプトを観客に読み解いてもらいたいけれど、直接的に伝えてもつまらない。だから意識的に補助線を張ったりしますが、福田さんは無意識のうちに張っているのかもしれませんね。

福田：無意識のうちに… 昔から、日常会話の中で話が飛躍してしまって、コミュニケーションが上手く取れないことがあったんです。でも、それが制作時には良い助

〒273-0031 千葉県船橋市西船 1 丁目 1 番 16-2 号 | 050-5469-1905 | info@kandaoliveira.com | www.kandaoliveira.com

けになっているのかもしれません。話の飛躍というより、イメージの跳躍という感じです。脈絡がないように見えても、私の中というか、別のどこかではちゃんとつながっていて、必然的な跳躍なんですね。制作時だけでなく、展覧会の際に作品を配置するときにも同様の跳躍は起きているので、もし誰かが良かれと思って見た目の美しさで配置しても、必然的なつながりは消えてしまうかもしれません。

小崎：ジェイムズ・ジョイスの「意識の流れ」を思い出します。どうしてこの言葉を選んだのかを聞いたら答えられないけれど、そこには必然性がある。

福田：そう、その必然性。そういった跳躍はイメージでも起きるし、言葉でも起きますよね。ある言葉から全く違う言葉が出てくるのには理由があって、実際は支離滅裂ではないでしょう。

小崎：そうした言葉のつながりは、構造的にはオヤジのダジャレと同じですよね。

福田：そうなんです！ダジャレをみんながなぜ面白おかしく笑ったりするのか分からなくて… ダジャレをすごく真剣に受け止めてしまう。言葉の不思議さがそこにあるから、笑い飛ばせないというか…

小崎：でも、自戒を込めて言うと、オヤジのダジャレには独創性がないんですよ。詩人やアーティストがつくる連想の仕掛けは、独創性にかかっているじゃないですか。今まで誰も考えたことがないような言葉やイメージのつながりを見いだした人が「天才芸術家」って呼ばれるんじゃないかな。

福田さんの回文もそうですよね。福田さんは言葉を取り出すだけのように仰っていますが、それを発見できる人は少ないですよね。

福田：回文は円周率みたいなものなんです。すでにどこかにある無限の配列から一部を抽出するというか… もともと過去現在未来のあらゆる言葉の配列が潜在している場所があるという気がしてならない。

子どもの頃はものをはっきりと認識できなくて、世界には境界線がなく、微細な粒子の均一な集まりであるような感覚を持っていました。ときにはそれらの微粒子が細かな言葉の粒子になって循環していて。絵を描いているとその感覚を思い出します。それはきっと、たとえ忘れていても誰もが知っている感覚で、個人の中に潜在しているものだと思うのです。

〒273-0031 千葉県船橋市西船 1 丁目 1 番 16-2 号 | 050-5469-1905 | info@kandaoliveira.com | www.kandaoliveira.com

小崎：そういった潜在していた感覚を思い出させたのが、今回の展覧会に共感する方が多かった理由のひとつかもしれません。

ものとの純粋なやりとりに立ち戻る 誰にも見せることのない作品

福田：こちらの《ひと粒の泡のなか》は少女漫画のコラージュの新作です。無数の泣いている目、それから、袖やハンカチや襟など身体と外界の境界にあたるもの…「世界の縁」的な部分もあります。

小崎：やっぱり〈境界〉や〈縁〉なんですね。私ってなんだろうと考えたとき、「ここまでは私で、ここは私じゃない」といったことを考えたりしますか。

福田：そもそも、「私」そのものは作品にはほとんど必要ないと考えているんです。潜在しているもの、自分でコントロールできないものの方に興味があるのかもしれません。

〒273-0031 千葉県船橋市西船 1 丁目 1 番 16-2 号 | 050-5469-1905 | info@kandaoliveira.com | www.kandaoliveira.com

小崎：むしろ世界に関心がある。

福田：この世界に存在しないとはどういうことなのか、という意味での世界なのかも。

撮影 Kanda & Oliveira

小崎：もうひとつの展示室には、画集をコラージュした《わたしたち、言葉になって帰ってくる #02》がありました。

福田：《わたしたち、言葉になって帰ってくる #02》は、さまざまな名画に描かれている女性の目や髪など体の細かいパーツを画集から切り取ってコラージュした作品です。際限まで分解して別の姿に再生するという意味では、同じ展示室にある、本のしおりをほぐした《書物の魂 #02》も同じですね。

小崎：これは作品のスケールでいうと、分子と原子くらい違いがありますね。

〒273-0031 千葉県船橋市西船 1 丁目 1 番 16-2 号 | 050-5469-1905 | info@kandaoliveira.com | www.kandaoliveira.com

福田：原子といえば、先ほど存在するとかしないといった話がありましたが、理想とするところはミクロの世界に近いのかもしれません。原子の中で粒子の状態が入れ替わるような、私たちの肉眼では捉えることができない存在に興味があります。

原子の中で起きていることも現実だけれど、存在については、私たちの等身大の現実ではあり得ないことが起きていますよね。そういうものに憧れる気持ちがあります。なかなか作品にするのは難しいのですけれど。

小崎：絶対に観察できないものですしね。

福田：そうですね。観察された途端にその状態ではなくなってしまうというか…
でも、それは先ほどお話しした「誰も観ていなくても存在が成立するもの」にもつながりますね。時間も因果律も無い閉鎖された部屋の中で何が起きているのか、私たちには分からないですから。その中で起きていることに希望を感じます。

じつは時々、絶対に誰にも見せない絵や作品——作品とは言えない何かですがーーを描いたり手掛けたりしています。私にはとても必要なことなんです。

小崎：それはどうしようもなくやってしまう感じでしょうか。それとも、やろうと決めてやるのでしょうか。

福田：若い頃は無意識にしていたんでしょうね。今は、やむにやまれず…というときもあれば、今日はそうしようと決めるときもあります。誰かに見せるためではない無心の行為を忘れずにいないと何かを見失ってしまうというか、ひとりきりになることで、ものとの純粋なやりとりに立ち戻っていけるような気がするんです。

小崎：そんなこと聞いちゃうと、それを見たくなりますね。

福田：……だめです 笑

小崎：いや、冗談です 笑
でも、こうして展示されている作品とは別に、福田さんには人に絶対見せないって決めている作品があるということを知れて良かったです。見せる作品とはどう違うのだろうかとか、もっと過激な作品なのだろうかとか、いろいろと妄想するじゃないですか。たぶんそうした妄想が、アート鑑賞の一番の楽しさだと思います。

〒273-0031 千葉県船橋市西船 1 丁目 1 番 16-2 号 | 050-5469-1905 | info@kandaoliveira.com | www.kandaoliveira.com

神田：福田さんの作品はもともと制作としてではなく、ご自身の中でずっと続けていたことを、今になって作品として見せているものも多いと思うんです。その作品とそうでないもののどこに線を引くのかも難しいと思うんですけれど、さらに、それ以上に本当に見せない作品があるのだと思うと、一体どんなものを作られているのかなと、いろんな想像が巡ります。

小崎：妄想しますよね。

またデュシャンの話をすると、《秘めた音に》という作品があります。糸玉を２枚の亜鉛板で挟んでネジで留めた作品なんですが、デュシャンはそれをパトロンのウォルター・アレンズバーグにプレゼントするとき、「僕は見ないでおくから、何かをこの糸玉の中に入れてほしい」と言って、何かを入れさせたんです。振ると音がするけれど、何が入っているのかは知らないし、死ぬまで中身を確認しないと本人は主張しています。

僕は、それは嘘で、デュシャンは知っていたと確信しています。でも、作品を所蔵するフィアデルフィア美術館のチーフキュレーターに聞いても、「僕は知らないし、知らないでおこうと思っている。」って言うんです。そういうのがいい、素敵な話だなと思います。
でも、本音を言えば、やっぱり知りたいんですよね。福田さんの「絶対に人に見せない」作品を想像すると、すごくもやもやします（笑）。

〒273-0031 千葉県船橋市西船 1 丁目 1 番 16-2 号 | 050-5469-1905 | info@kandaoliveira.com | www.kandaoliveira.com